

<b>Title</b>	「神の忍耐の時」の中で、苦難の救い主に仕える(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：主題講演)
<b>Author(s)</b>	Richard.J.Mouw 岩田, 美枝子・訳
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 53-70
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4946">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4946</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「神の忍耐の時」の中で、苦難の救い主に仕える

リチャード・J・マオ

岩田 三枝子・訳

ニューヨーク大学の著名な哲学者トマス・ネーゲル (Thomas Nagel) が、宗教心に関する話題で、最近議論を呼んだ。ネーゲルは自称無神論者であるが、無神論者が自分たちの信念を擁護するためにたびたび行う説明には自分はそれほど納得していない、というのである。ネーゲルの近著『心と宇宙——なぜ物質主義的新ダーウィン主義の自然の概念は、ほぼ確実に誤りなのか』という題名は、彼の言葉の意味をよく示している。<sup>①</sup>

ネーゲルの仲間である無神論者たちは、彼のその発言に恐怖感を抱いた。それは、ネーゲル自身は自分は無神論であるとしているのだが、無神論者たちには、ネーゲルがまるで神への信仰を後押ししているかのように見えたからである。ネーゲルは、そのような無神論者たちからの批判に応答している。自然主義の実在理解には疑問を持たざるを得ない一方で、人間の苦難の現実には「神存在に対する最も強靱な反対論」の根拠となる、と考えているということである。このような議論は「立証のレベルに達しない」一方で、有神論の真实性を「疑うための、強靱な理由」となる、とネーゲルは述べている。<sup>②</sup>

私たちはこの世界において悪を経験しているが、言うまでもなく私はキリスト者として、このような経験のゆえに、聖書の神の存在を否定しなければならぬとは信じていない。しかしこのような悪の経験において、無神論者や不可知論者からの挑戦を退けることもできない。これらの問題の妥当性について、ここにおられる方がたを説得する必要はない。私たちがここに集まっているのは、二〇一一年に日本が経験した筆舌に尽くしがたいような破壊と苦難を、生ける神への信仰の中でどのように認識すべきかを共に考えるためである。私たちの心に、次のような問いが浮かんでくるのは自然なことである。このような時に、神はどこにおられたのか？ 二〇一一年に起きた日本の巨大地震の経験の惨事から学ぶ霊的な教訓があるのかどうかを問いかけることに意味があるのか？ 満足のいく答えを見出すことがない問いに何度も何度も直面しているのに、この破壊された世界の悲惨な状況の最中であつて、神の国の代理人として召されているキリスト者の共同体はどのように前進するのだろうか？

このような困難な状況下で、どのように主に仕えるかという計画を提案したいと思うが、この計画を語るためには、まず、その計画の遂行の足かせとなつていく霊的・神学的懸念について考える必要がある。信仰の共同体は何世紀もの間、「悪の問題」に苦悩してきた。そして、私はこのことに関して何か目新しい知恵を提供しているのではない。しかし、現在の状況において、私たちが頼ることができる豊かな知恵がある。その知恵の中で、重要であると私が考えたものを、強調したのである。

過去の歴史の中から悪の問題に関する知恵を振り返るには、ヘブル語詩篇にまでさかのぼるべきであろう。ここ数十年、英語圏では礼拝の場で、新たにされた「ワーシップソング」の形式で詩篇を耳にする。これも良い方法であるが、残念ながら、礼拝のための詩篇の力を完全に認識しているとはいえない。聖書的な詩篇は、単なる「賛美」ではない。それは悲しみの表現も含んでいるが、実際には「悲しみ」という表現では、その領域を表現できないものである。時折、詩篇の作者は神に対してあからさまに敵意を表現し、時には嘲りさえも用いている。例えば、詩篇四四・二三―

二四（日本語聖書新共同訳では二四―二五）にそのような表現が見られる。「目覚めてください！」と詩篇の作者は神に叫ぶ。

主よ、奮い立ってください。

なぜ、眠っておられるのですか。

永久に我らを突き放しておくことなく

目覚めてください。

なぜ、御顔を隠しておられるのですか。

我らが貧しく、虐げられていることを

忘れてしまわれたのですか。

この詩篇は、私たちには神に不満を述べることを許されていることを教えてくれる。私たちがたびたび経験する苦闘に対して主は無関心だ、と主に訴えることさえも許されている。聖書自体が記しているにもかかわらず、キリスト教共同体は、その御言葉に対してどのように応答するかを示していないことがよくあるのは、残念なことである。結果として、私たちは正しく敬虔な心と思いにある時のみ神に語りかけることができる、という誤った印象を持つことになる。それでは、真の祈りには不平や絶望さえも含まれるという、より健全な詩篇の靈性を用いる機会が奪われてしまう。

この荒々しいともいえる姿勢を、神の御前における靈的な誠実さにまで高めるために、ユダヤ教の共同体から多くを学ぶことができる。ユダヤ教には、嘆きの遺産が今なお息づいているのである。ラビのデービッド・ウルプ (David Wolpe) は、『砕かれた心の癒し主——ユダヤ教の神観』という靈的示唆に富んだ短い本を書いた。その中でラビ・ウ

ルプは、ラビの伝統の多くの興味深い事例から、神の主権に関して、遠慮なく神に対して不満を訴えるユダヤ教的なあり方を示している。それは、自分たちが見捨てられた、あるいは自分の身に起こることを神が許されたということに非常な困難を感じている、と神に訴えることは、実は神と人間との間の深い親密性をあらわす表現だ、というのである。<sup>(3)</sup> 例えば、ソドムの町を破壊からお守りください、とアブラハムが神を説得しようとする場面がある。その中でアブラハムは、「正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか」(創世記一八・二五)と訴えているが、このような「大胆さは、聖書の読者にとつて、大きな驚きである」とウルプはいう。<sup>(4)</sup> もし神が主権を持つておられ、神が本当に「すべての地の審判者」であるなら、神が定められたご計画をアブラハムは疑わずに受け入れるべきではないだろうか？

けれどもそのような見方は、ヘブル語聖書に描かれている神の主権を読み違えている、とウルプは説明する。神は、私たちが守るための規範を創造された方である。私たちの身に起きることは主が許されたものであることを踏まえると、これらの規範を守ることがいかに困難であるかを神に語ることを拒むならば、その行為は人間に対する神のご意志を侵害することになるのである。

神に疑問を投げつけないということは、何が良い事なのかを本当には理解していないということである。すべての宗教は、人間が善に關する知識を持つていることを前提にしている。それゆえ私たちは、倫理的規範の創造者ご自身にも、その同じ規範を守らせる権利を持つているのである。神は、ご自身が宣言されたことから逃れることはできない。神は地のすべての審判者であられる。神は義を行わなければならない。<sup>(5)</sup>

ウルプの議論の中に、私のお気に入りエピソードがある。それは、神と行き過ぎた議論をした有名なラビの話である。ヨム・キプール（贖罪の日）の最初の礼拝の準備のために、この尊敬されていた指導者は契約の箱の前に立った。時間が来るまでは規定の祈りを始めてはならないという義務があったので、ラビは静かにその時を待っていた。ラビが何か深く考えている様子だったので、会衆の人々はラビが時間通りに開始しないのではないかと心配し始めた。すると突然、ラビが大声で叫んだ。

「主よ。今年も、いつもの年のように、あなたに赦しを求めるために、あなたの御前に参りました。けれども昨年、私は死をもたらすようなことは何一ついたしませんでした。この世界に伝染病もたらしませんでしたし、地震も、洪水も引き起こしませんでした。女性を未亡人にさせたり、子どもを孤児にさせたりすることもいたしませんでした。これらのことをなされたのは、私ではなく、神様です。それでも、あなたは私が赦しをこいねがうことを求めておられるのです。」

偉大なラビは一息置くと、温和な声で続けた。「けれども、あなたが神であり、私が見ただけのラビ・イツァクに過ぎないゆえに、あなたの名は偉大であり、聖なるものです。」そして彼は礼拝を始めた。<sup>(6)</sup>

このようなラビの主への呼びかけに、ショックを受けるキリスト者中にもおられるだろう。けれども、このような姿勢の中に、霊的な洞察を見ることが大切である。神への冒涇と深い霊的な嘆きとの境界線は微妙なものかもしれないが、この境界線は重要である。そして、ラビはその境界線を越えることはなかった。ラビは最高の真剣さを持って、神の神聖さについての神ご自身の啓示を受け止めていた。主は誠実であり、契約を守る神である、と主は私たちに語りかけている。そして、そのようなには思えない状況の中でも神の誠実さをどのように理解すべきなのか、と真の苦悩に

よつて神に問う時、私たちは、死にもの狂いで神を愛し、自分の歩みの中で神のご意志を理解したいと願う神の子供として神に語りかけているのである。そのような中で、ご自身の被造物に対して示されている愛に満ちた思いやりのしるしを神が私たちに改めてあらわしてください、という希望を持つことができるのである。そして、このようなしるしを待ち望んでいる時でさえ、たとえその目的が謎に包まれているとしても、私たちは、神の主権の目的に信頼する力を祈り求める必要がある。

オランダの神学者であるハリー・カイトルト (Harry Kuitert) の著書の中に、神の主権の目的に対する信頼の土台がよく表現されているエピソードがある。彼が牧師としてオランダの田舎町のカルバン派の教会で仕えていた時、悲惨な攻撃によつて何名かの会衆が命を落とした。彼は、悲しみに包まれている遺族たちを集め、共に慰めを見出そうとしたが、遺族たちの経験の助けとなる言葉が何もないのだとついに告げることしかできなかった。この時、遺族の一人が立ち上がつて、このように述べた。「牧師先生。私たちの知らない方が、私たちにこのことをなされたのではありません」。

このキリスト者たちは、彼らが愛し仕えている主権者である神が、なぜ彼らや愛する者たちの身にこのようなことが起こることを許されたのか、と悲しみの中で問うていた。けれども、この謎に満ちた神聖、そしてこの謎のすべての背後には「隠された神の親密な御顔」がある、という確信を彼らは何とかして持ち続けることができた。<sup>(7)</sup> 村人たちは、牧師の神学的な困惑を完全に理解していたが、その深い悲しみの中でさえ、彼らはこの土台を明確に保つことを願っていた。愛の神に対する彼らの信仰は試されていたが、弱められてはいなかった。

カイトルトの神の「御顔」のイメージは、このエピソードを理解する助けとなる。キリスト者は、神の真の御顔がどのようなものであるのかを、ただ推測することで満足する必要はない。私たちはイエス・キリストの御顔の中に、神のご性質のあり方を見てきた。そのお方は、「わたしを見た者は、父を見たのだ」(ヨハネ一四・九)と弟子たちに、そし

て私たちにも語っておられる方なのである。

そしてまさにこの点において、日本のキリスト教共同体は、特別な霊的・神学的資質を持ち合わせている。私らがなぜこのように申し上げるのかを、日本での神学的対話から学んだ個人的な事柄をお話することで、説明しよう。

二〇一〇年の夏、私は東京基督教大学で開かれた会議に参加する機会を与えられた。その会議では、よりいっそうの憐れみのキリスト論の必要性に焦点が当てられた。そして希望を持ちつつ、多様な文化的感性を用いて、この必要性をどのように語るのかを明確化できた。会議には、日本、韓国、イギリス、オーストラリア、そして米国から学者たちが集まり、事前に準備された論文によつて議論も活性化された。

これらの議論は実に、私の思考を刺激してくれるものだった。後に、トリニティ・エヴァンジェリカル神学校のダグラス・スウィニー (Douglas Sweeney) 氏と記録を確認する中で、この会議で得た洞察を書籍にして共有しようとした。その書籍が、Baker Academic Press から *The Suffering and Victorious Christ: Toward a More Compassionate Christology* (苦悩と勝利のキリスト——よりいっそうの憐れみのキリスト論を目指して) と題して、間もなく出版される予定である。

私はこの数十年、この憐れみのキリスト論に関して長らく考えてきたが、最近の宣教学の「文脈化 (コンテクスチュアリゼーション)」の卓越した考え方から非常に影響を受けている。その基本的な考え方は、神学はその文化の文脈と相互に作用しあうべきである、というものである。私も日本の会議のために発表を準備しながら、異なる宗教的・文化的文脈の中で福音を伝えた宣教師たちが幾度も語ってきた考察に教えられた。それは、イスラム教や仏教によつて形成された文化の基本的な異質さへの対応を迫るものだった。そして、この非常に異なる文脈の中でどのようにキリストの贖いの異なる側面が強調されるべきか、という問いであった。

文化文脈化の考え方の実践的適用の一つとして、キリストの贖いを宣教する際の神学的公式がある。それは、例えば



私たちが宣教を行う時に、イスラム教によって形成された文化の中での伝え方と、仏教の影響を受けた文化の中での伝え方とは異なる形をとる、ということである。キリスト教神学では、永遠なる超越の神は贖いの業を成し遂げるために、ナザレのイエスの中に受肉された方として人間世界の破れの中に入ってきてくださった。この福音をイスラム教徒たちに伝える時には、アラームも超越の神であるが、親密さを持つて人間の苦悩の中に入ってはこなかった事実を考慮に入れる必要がある。一方、仏教について言えば、そこには苦悩の現実への強い宗教的な感覚が存在しているが、超越の主権者である神を認識する神学的・哲学的余地が非常に限られていることを認識する必要がある。キリスト教神学は「私たちと共におられる神」に焦点を当てるが、これは、神が威厳に満ちた主権者であられると同時に、その超越の神が、受肉によって私たちの破れを担ってくださったということである。その文化の文脈の中で、この複雑な教えのどの側面を強調するかということは、その文化が超越や苦悩の現実をどのように理解し、また理解していないかということに、非常に関わっている。

少し簡略化しすぎたかもしれないが、私にとって、このような見方はおおむね有益なものに思えた。けれども、数年前の日本の議論を通して、私は自分の欠陥に気がついた。私はこのような枠組みを、「修正」する方法として手軽に利用していたのである。例えば、仏教に影響を受けている文化は歪んだ神理解を形成しているだろうか、より広いキリスト教の伝統がある私たちの神学によって、もっと「バランスのとれた」見方で土台を見出す必要がある、と考えていた。日本での議論の中で、私はこのような自分の傾向に気がついた。そして、実際に私のような者たちが自分たちの神学的「バランス」が訂正されることからどれだけ遠く離れているか、ということに気がつき始めた。

例えば、小山晃佑の『富士山とシナイ山』（一九八五年）という書著の中にある例を挙げてみよう。この中で小山は、悪の力に勝利された方としてキリストを提示する「勝利のキリスト」という西洋神学は、勝利の側面を強調しすぎる点で教理的なバランスを欠いているとして、西洋の読者に修正を促している。それは、「ギリシャ哲学の精神とラテンの軍

「事的精神」の影響を強く受けており、ここでは「完全なキリストであり、力強く、勝利したキリスト」が作り上げられている、と小山はいう。そして、「傷ついたキリストのうち、果たして希望を見出すことができるのだろうか。『弱く』、不快さを催すほどのイメージの中で、どのようにキリストに信頼できるのか」という疑問が生まれる、というのである。そして、「強い西洋文明化と『弱い』キリストとは、調和的に和解することはできない。キリストは『強く』あるべきだ。強いアメリカであるべきだし、同じく強いキリストであるべきだ!」、と主張するキリスト教的勝利主義を好む文化文脈化に迫る。<sup>(8)</sup>

小山が示しているように、政治的・軍事的帝国主義との強いつながりがあるかどうかは、他の方々の判断にゆだねたいと思うが、小山が指摘している主要点は確かに重要である。私たち西洋人は他の文化文脈化と接する時、神学的「バランスを欠いている」点を文化の中で「修正する」手段を持っている、と確信している点に気をつける必要がある。そのような「バランスの欠け」は、実は自分たちの神学的側面にこそある、ということを常に考慮する必要がある。

私個人としては、キリスト論に関して西洋思想は非常にバランスを欠いていると確信している。そして私は、日本のキリスト教思想との出会いによって、この破れた世界の苦悩を分かち合う必要性の理解を大いに育まれた。例えば、遠藤周作は小説の中で、キリスト論的な主張を表現しているが、その中で、イエスについてこのような発言がある。

あの方は、生涯、はじめであられたゆえ、はじめな者の心を承知されておられます。あの方はみすばらしく死なれたゆえ、みすばらしく死ぬ者の哀しみも存じておられます。あの方は決して強くもなかった。美しくもなかった。……あの方は一度も、心傲れる者、充ち足りた者の家には行かれなかった。あの方は、醜い者、みじめな者、みすばらしい者、あわれな者だけを求めておられた。<sup>(9)</sup>

そして別の箇所でも、遠藤は自身の言葉としてこのように記している。「日本人の宗教心は、苦悩と弱さを理解される方としての神観に特に向けられています。日本人は、神々や仏の中に、厳格な父よりも、暖かな心の母を求めているのです」<sup>(10)</sup>。

遠藤がここで示す「厳格な父」と「暖かな心の母」としての神の対比は、日本人のキリスト者共同体が二〇一一年の災害の経験をどのように語ることができると考える時に、優れた出発点となる。詩篇では、母としての神への言及は明確にはないが、神の子供たちが神の「翼」の元に保護を見出すという多くの言及は、明らかに、母鳥が雛たちを養い育て、守る姿を示している。そして福音書では、イエスがエルサレムの町のことを嘆く場面で、母としてのイメージが明確にあらわれている。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」(マタイ二三・三七、ルカ一三・三四)。

人間の中に受肉された御子を示す時、神の「暖かな心の母」としての特性を強調することは文化的理由として良いだけではなく、それは堅固な聖書の神学的理解でもある。私たちの身に恐ろしい災害が起こることを全能の神がなぜ許されたのかと問いたい思いを、ただ消し去るものは何もない。しかしたとえこの問いを尋ねたとしても、私たちと同じ苦しみを味わわれた御子の存在を感じとるべきなのである。

神学者のジェリー・シツター (Jerry Sitzer) は、キリストの苦悩を実感した時、深い悲しみを乗り越えることができた。ある夜、飲酒運転の運転手が、前にいたシツター一家の乗った車に追突した。その瞬間、シツターは、母と妻、そして幼い娘を失った。どれほど長い間、霊的にも神学的にもこの喪失感と苦悶したかを、シツターは著書の中に記している。事故の後、主権者である神はとも遠く離れているように見えた。神は「冬の氷のような、寒く、吹きさらしのそびえたつ崖の上において」、彼の上に重くのしかかり、「彼の存在や痛みには全く無関心」のように見えた。

彼が、神の関心のしるしを見せてくださいと神に叫び求めた時、「自分の声の孤独なこだまだけが聞こえた」<sup>(11)</sup>。

彼が神の主権について平安を見出したのは、イエスの苦悩の中に新たな意味を見出した時だった。

受肉は、そうする必要がないにもかかわらず、神がとても愛情深いがために、人間になることを選択し、喪失を苦しまれたという意味だ。私は長い間、非常につらい悲しみの中にあつた。しかし、すべてを支配されるお方である主権者なる神が、私を感じている痛みを毎日共に経験してくださる同じ神であることを知った時、慰めを見出した。私の落ち込んだ穴がどれほど深い穴であつたとしても、私はそこで神を見出し続けた。<sup>(12)</sup>

神が私たちの苦悩の中に入つてこられたということを認識することは慰めの源泉だが、それはまた、キリスト者共同体にとつての行動の根拠となる。ご存じの方もあると思うが、私は、優れたオランダ神学者であり指導者であるアブラム・カイパー (Abraham Kuyper) のファンである。カイパーは、洞察にあふれた神学的貢献に加えて、二〇世紀初頭のオランダ首相としても、公共活動において仕えた。私は、カイパーの有名な宣言を引用することが好きである。「イエス・キリストが、『私のものだ！ 私に属しているものだ！』と叫ばないものは、全被造物の中で一インチさえない」<sup>(13)</sup>。私は、ここで強調されている点が気に入っている。それは、公共の場において弟子として歩む聖書の根拠が提示されているからである。けれども、この宣言が促しているような勝利の精神については、懸念している部分もある。勝利主義は、アメリカの福音主義世界の特有な問題である。そこでは宗教右派が、キリスト者たちに「キリストのために、私たちの国を取り戻そう！」と呼びかけるような闘争心を助長することがたびたびある。私は『Abraham Kuyper, Meet Mother Teresa: The Problem of Triumphalism (アブラム・カイパーのマザー・テレサとの出会い——勝利主義の

『問題点』という著書の中で、このような攻撃的「奪取」精神について記した。マザー・テレサは、カルカッタのすべての場所がイエス・キリストに属していると確かに信じていたが、キリストの名によつてすべての場所を自信満々に征服するために前進するのではなく、キリスト者は、死にゆくハンセン病患者や「最も貧しい者」たちの苦しみの中におられるキリストの臨在の代理人として、彼らのもとに憐れみを携えて出ていくべきなのだ、と適切に認識していた。

「共にいる」ことは、キリスト者の特徴的な行為である。特に日本の状況のように、キリスト者が少数者としてサブ・カルチャーを形成している社会文脈の中で「共にいる」行為を育むことは、きわめて重要である。それは、日本だけではなく、「ポスト・キリスト教」の文脈が明らかに増加している北米においても同じことがいえる。

そのような行為を育むことが大切だとしたのは、それはキリスト者が自然に身に着けていることではないからである。私たちは、自分が属している、より大きな文化との関わり方を理解する時、二つの基本的な選択肢に限定する傾向を持つているようだ。それは、公共への参与から身を引くか、それとも、公共の場を乗っ取るかとするか、という選択である。これは、乗っ取ることなく公共の場にとどまる、という重要な代替手段を除外している。それは、神がなお愛しておられる破れた反逆的な被造物と共に、神ご自身の長い苦しみを共有する明確な理解を持つて、正義を押し進めるために働く、という選択である。

メノナイト神学者であるジョン・ハワード・ヨダー (John Howard Yoder) はすでに亡くなったが、彼は、私たちが「神の忍耐の時に生きている」ことを思い起こさせてくれる。けれども、私たちが召されている忍耐は、受身的に待つことではない。それは、これから時が満ちて訪れる王国の到来を積極的に待ち望むことである。そして聖書は私たちに、この積極的に待ち望む姿勢の中に、非常に広い任務を与えている。その鍵となる任務は、古代の人々が不道徳な都市バビロンに捕囚として連行された時に、主が人々に与えられたものである。イスラエルでの生活に慣れていた人々にとって、バビロンは非常に霊的方向性を失わせる場所であった。イスラエルでは、神への真の礼拝の神殿があ

り、土地の律法は神が啓示されたことに基づいていた。けれどもバビロンではそれらすべては失われ、かき乱された忍耐の文化の中で、どのようにしてなおおの神の誠実なしもべであることができるのか、と人々は戸惑っていた。

エレミヤ書二九章では、人々がどのようにしてこの新しい状況に対処すべきかを、預言者が主からの言葉として告げている。それは、彼らの家族が住むための家を建設し、家畜のための作物を植えるべきだということであった。神はまた、結婚して、子どもを産むことによつて、「そこで人口を増やす」ことを望んでおられた。そして、神が彼らの生活のための任務を与えられたのは、バビロンの市民としての任務であった。「家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。それから人口を増やし、減らしてはならない。わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから」（エレミヤ二九・五―七）。「平安」というへブライ語は、ここでは、シャロームが用いられている。それは「平和」と訳すことができるが、さらに、正義、公正、癒しの概念も含んでいる言葉である。

新約聖書では、使徒ペトロが最初の手紙の中で、バビロンにいた古代イスラエル人たちと同じような状況にある教会に対して、彼らもまたその場所にあつて「異邦人であり、捕囚の民」であると語りかけ、広い任務を与えている。それは、バビロンでの捕囚の民に対するエレミヤの命令と同様の任務であつた。「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」（一ペトロ二・一二―一三）。

それは、今日の私たちすべてにとつても当てはまる、広い任務である。仕えるようにと主が私たちを召された場所で、神の栄光をあらわす誉れある行いを遂行することによつて、その場所のシャロームを求める、ということである。

そして私は、このような誉れある行いは、他者の必要に対するキリスト者の共感から生み出されるという事実を、強調したいと思う。私はこの点について、ステイブーン・ニール司教 (Bishop Stephen Neill) が語られた言葉から、教えられた。ニール司教はすでに亡くなられたが、南インドで数十年間にわたり奉仕された方である。私は神学生だった一九六〇年初頭に初めて、ニール司教が書かれた『キリスト教信仰とその他の信仰』という素晴らしい著書を読んだ。その中で、ニール司教は、ヒンズー教についての議論をこのように結論づけている。

もし、今から今世紀(二〇世紀)の終わりまでの間に、インドにおけるキリスト者の証しの働きが過去一世紀よりもさらに厳しいものになるとしても、キリスト者は驚くべきではない。キリスト者の働きの大部分は、ヒンズー教の内部に向けられるものだという可能性に備えるべきである。それは、ヒンズー教徒に問いを投げかけることであり、ヒンズー教徒が自らをよりよく理解するための、助けとなることである。そういった問いかけへの答えがすべて全く満足できないものであることを、キリスト者は常にヒンズー教徒に気づかせようとするだろう。そして、問いかけに対する満足のいく答えを持つておられる主なるイエス・キリストというお方を示そうとするだろう。<sup>(14)</sup>

イスラム教、仏教、ポストモダンといった他の共同体と私たちとの関係についても、同様のことがいえるであろう。私たちの働きの多くは、可能な限り私たちの共感のすべてを用いて、彼らが自分自身をよりよく理解するための助けとなり、仲間である人々に問いかけることによつて、これらの共同体の枠組みの中で行わなければならない。しかし、その深い問いかけに対するすべての答えは、急進的で満足できないものだという事実<sup>(15)</sup>に友が直面する助けをし、彼らの深い願いを満たすことのできる主なるイエス・キリストというただ一人のお方を指し示すという願いが、行動の原動力

となるのである。

けれども、それはただ語るだけにとどまらない。同時に重要なのは、試練や苦難の中にある彼らの傍に立ち、彼らの幸福、つまりシャロームを求め、神の栄光をあらわす誉れある行いで彼らを包み込むことによって、苦しみ、問いを抱え、そして悲しんでいる人々と一体となるという私たちの共感である。それは、憐れみである場合もある。

そのことは、私たちの側の霊的な努力なしには起こりえない。主が私たちに求めておられる多くのことは、私たちは自然のままには持ち合わせていない。私たちは常に、関わりすぎるか、もしくは、背を向けているかのどちらかに傾きがちである。しかし代替手段は、私たちにチャレンジを与えるものである。この世界にはすでに完全なふさわしいメシアが与えられており、世界を変えることは私たちの任務ではないと認識することである。私たちの責任は、主が私たちのために与えられた機会を用いて、主の恵みによってのみ私たちに与えられる霊的な性質、つまり、忍耐、憐れみ、共感、そして希望といった性質を伴い、主が私たちを置かれた場所において、その状況の中で主の御心に従うことを求めることによって、主に仕えることである。この講演を終えるにあたり、この希望ということについて、私の経験を話したいと思う。

多忙な時間をすごした後で長時間の飛行機の旅をする時には、私は小説を読んでリラックスすることがよくある。もともとリラックスしたい時には、「大文学」は読まない。人気のある小説の中から「わくわくするような」ものを選ぶ。その中でも優れたものというのもあるが、多くの場合、たいていは次のような共通の構想を持っている。それは、四八〇ページある小説で、その小説の半分の二四〇ページ目になると、主人公は大きな困難に遭遇する。主人公の家が敵に囲まれたり、愛する女性がどこかで捕らえられたりする。物語のこの箇所に来ると、私はその小説家が生み出したその構想が不安になる。そこで私はどうすると思われるだろうか？ 最終ページを見るのである。

小説の最後をめくり、最終ページを注意深く読むことはしない。ただ、二つのことを知るために、ちらつと見るので



ある。一つは、最後まで主人公がまだ生きていくかどうかということ。そしてもう一つは、彼が愛する女性と共にいるかどうかということである。この二点を四八〇ページ目で確認すると、私はまた二四〇ページ目に戻って、最後までゆつくりと読み進めることができる。私はまだ物語を楽しんでいるが、その道筋にあるすべての複雑な構想を楽しみながら、その物語を読み進めることができる。けれども私は最終ページを見ているので、最後には物事がうまくいくのだという自信と確信を持つて読むことができる。

より真剣なものとして、私は皆さんにこの良き知らせをお知らせできる。私は最終ページを見たのである。最終ページでは、やがての日にイエスが再び訪れ、イエスが再びあらわれるその時、「見よ、私はすべてを新しくする」と宣言されると書いてある。そしてそのイエスのあらわれの時には、すべてが新しい創造の元で、良きものとなるのである。がんもなく、心臓発作もない。テロも戦争もない。子どもが飢えることもなく、売春目的の人身売買もない。地震も津波もないのである。

そして、最終ページでこの良き知らせを知らされているので、私たちは希望を持って、ハッピーエンドに向かって前進していくことができる。それは、究極のハッピーエンドである。永遠の、栄光に満ちたイエス・キリストの王国の完全なあらわれである。

これは、困難な問いに対する簡単な答えを与えるものではない。私たちはなお二四〇ページ目の時点におり、これらのことすべてがどのようにして良い結論へと導かれていくのだろうかと疑問に思うのは、当然のことである。しかし、私たちはキリストの王国の目的のために積極的に仕える、という希望のうちに前進できる。それは、私たちが最終ページを知っているからなのである。

日本のキリスト者の共同体の皆様にとつても、希望を与えるものでありますように、と祈る。

註

- (1) Thomas Nagel, *Mind and Cosmos: Why the Materialist Neo-Darwinian Conception of Nature is Almost Certainly False* (Oxford University Press, 2012).
- (2) Nagel responding to critics, <http://www.nybooks.com/articles/archives/2012/dec/06/what-can-be-proved-about-god/?pagination=false>
- (3) David J. Wolpe, *The Healer of Shattered Hearts: A Jewish View of God* (New York: Penguin Books, 1990), 140.
- (4) Wolpe, *Healer*, 141.
- (5) Wolpe, *Healer*, 141.
- (6) Wolpe, *Healer*, 158.
- (7) H.M. Kuitert, *I Have My Doubts: How to Become a Christian Without Being a Fundamentalist* (Valley Forge, Pa.: Trinity Press International, 1993), 97.
- (8) Kosuke Koyama, *Mount Fuji and Mount Sinai: A Critique of Idols* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1985), 242.
- (9) Shusaku Endo, *The Samurai*, trans. by Van C. Gessel (New York: New Directions Books, 1982; orig. Japanese ed. 1980), 220–221. (遠藤周作『侍』新潮社、一九八〇年、二七九頁)
- (10) Shusaku Endo, *A Life of Jesus*, trans. Richard A. Schuchert (New York: Paulist Press, 1978; orig. Japanese ed., 1973), 1. (『イエスの生涯』英訳版序文)
- (11) Jerry Sittser, *A Grace Disguised: How the Soul Grows Through Loss* (Grand Rapids: Zondervan, 1995), 135–136.
- (12) Sittser, *A Grace Disguised*, 142.
- (13) James D. Bratt ed., *Abraham Kuyper: A Centennial Reader* (Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing, 1998), 488.

(<sup>47</sup>) Stephen Neill, *Christian Faith and Other Faiths: The Christian Dialogue with Other Religions* (New York: Oxford University Press 1961), 98.